

憲法講話

—24の入門講義

長谷部恭男

2020年3月発売 / 460頁 / 本体2500円+税
四六判 / 並製



詳細を見る



編集
担当者
から

「講話」。その名の通り、著者が語るように著された、憲法の新しい教科書です。論点や法令・判例は、教科書として標準的なものを取り上げられています。憲法を初めて学ぶ人にも、理解が難しくないように、すでに憲法を学んだことのある人にも、さらに理解が深まるように、シンプルに見えて実は工夫の凝らされた文章です。入門の教科書で460ページ（本文は約400ページです）というと、少し分厚いと思われるかもしれませんが、24回の講義を聴くような気持ちで読み進めてもらえる一冊になっています。

記されているのは、憲法は日本の社会で現にどんな働きをしているか、どのような流れの中に今があるのか。そして随所で、心に留めたい言葉が語られてもいます。憲法を学ぶための教科書であることはもちろん、それだけでなく、私たち1人ひとりの良識に呼びかける本でもあります。装丁、印刷・製本も素敵ですから、文章も本のかたちも、全部を味わっていただけたらと思います。（三宅）

Point!

P

“読み物的な教科書” “教科書的な読み物” を目指しました。

憲法は、自己の存在のために生きていくための、その意味を教えるべきものである。それは、自己の存在を信ずる人にとっては、この世で正しい信仰をつかみ取ることができるとかによって、来世で永遠に幸に生きることができるとか決まらず、正しき信仰が何か、それを判断する客観的な物差しがあるわけではありません。異なる信仰は比較不能です。しかも、自分として正しい信仰はすべての人にとって正しい信仰は必ずしも、異なる信仰を激し対立と闘争をもたらします。記得ではなく改宗が、改宗が不可能であれば神の敵の標的が目標になります。血と汗の宗教戦争が長く続くとともに、

ただ、比較不能な価値観・世界観の激烈な闘争の中で、一時的に闘争の意義を疑う方がまわって来ます。この世に激し対立する複数の価値観・世界観が存在することは、事実として認めざるを得ない。しかも、来世が存在するか否か、それを知るべきではない。であれば、どのような価値観・世界観を奉ずる人も、人間らしく、公平に扱われる社会をこの世に構築すべきではないか、それが近代立憲主義です。多様な価値観・世界観を抱く人々、それぞれが平和で安全に暮らすことが可能とし、自身の才能を努力を生かして充実した人生をおくる機会を保障すること。憲法では、公世の福祉の實現と明はせず、それが近代立憲主義の立場から見た国家の存在意義です。

トマス・ホッブズ、ジョン・ロック、ジャン・シャット・ルソーといった社会契約論者と書かれる人々は、多かれ少なかれ、こうした見方を出発点として、人々の私的な生活環境では各自が選び取る

第1講 近代立憲主義の成立

003 | 002

※目次は、小社ウェブサイトの本書のページをご覧ください。

